



TITLE:

京都府におけるササ資源の持続的 利用に関する研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

東口, 涼

CITATION:

東口, 涼. 京都府におけるササ資源の持続的利用に関する研究. 京都大学
, 2018, 博士(農学)

ISSUE DATE:

2018-03-26

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21142>

RIGHT:

許諾条件により本文は2019-03-01に公開

(続紙 1)

京都大学	博士（農学）	氏名	東口 涼
論文題目	京都府におけるササ資源の持続的利用に関する研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>ササ葉は日本において食物を包装する代表的な植物葉の一つとして重用されてきた。京都ではササ葉の多くは京都市内の文化を支える祇園祭の厄除け粽や和菓子包装材料等として現在も不可欠である。求められる質を保証する加工技術は経験に基づく高度なものであり、量的な生産量と併せて、京都府北山地域がその基盤を支えてきた。これらの伝統的利用を支えてきた京都市北部地域のチマキザサ（分類学上はチュウゴクザサ、<i>Sasa veitchii</i> var. <i>hirsuta</i>、以下、ササ）は少なくとも数世紀にわたって好んで利用されてきており、ササ葉の京都市内における需要は現在では1000万枚程度であるとされている。しかし、2004～2007年のササの開花・枯死により、資源が枯渇し、流通が停止した。今回の開花では複合的な要因から群落の自然な再生が進まなかったことに加えて、社会の側にも過疎高齢化による伝統的利用技術の喪失が認められ、資源利用の存続が危ぶまれている。</p> <p>本論文は開花以前の京都府における伝統的なササ葉利用技術及び近年の資源管理体制と産地を取り巻く社会的状況の変化を調査・解析する他、ニホンジカの採食圧が資源量に与える影響の評価から生態学的な再生ポテンシャルも示すことによって、ササ葉の持続的利用のための提案を行うことを目的としたものである。本論文の構成は以下のとおりである。</p> <p>第一章では、研究の背景として、植物葉で食品を包むという“チマキ文化”が、地域資源利用の形で、世界各地で発生・発達してきたことを紹介している。日本国内に限っても同様の多様な地域性に富む利用が認められ、特に京都市周辺におけるササ葉の利用を、質・量ともに高い要求水準にありながら、数世紀にわたって持続的に行われてきた重要な事例として述べている。次いで、既往研究の概観を通して本研究の目的と意義を示した上で、本論文の構成について述べている。</p> <p>第二章では、在来知の記録という観点から、ササ葉の採集・加工に関する伝統的知識と技術を科学的知見によって明らかにすることを目的として、自然科学的視座からの評価を行っている。その結果、伝統的なササ葉の採集・選別はシンプルでありながら作業効率が高く、かつ資源の持続的利用が可能な技術であることを示した。また、伝統的な天日干し加工を経たササ葉は、現代において主流化している機械乾燥を経たササ葉よりも香りがよく、高い利用価値を維持している可能性も示唆した。これらの結果は、伝統的な技術が慣習的な人間の経済活動と自然環境の双方に対して親和的な在来知として地域に蓄積されてきたものであることを明らかにしている。</p> <p>第三章では、京都市北山におけるササの一斉開花による資源枯渇問題の発生とそれ</p>			

に伴う資源管理体制の社会的な変化について経時的に追跡している。その結果、周期的な一斉開花・枯死という植物としての生態上避けられない資源枯渇について、従来は人々の営みの中で自然に回復・維持されていたものが、現在では自然環境・社会環境双方に起因する要因から再生が進まなくなっていることを明示した。さらに、市民らによる取り組みの中で、ニホンジカ（以下、シカ）による採食圧の影響を排除する域内保全が重要な課題であると認識され、防鹿柵によって衰退するササ実生群落の保護が進められるようになった経緯が解析され、現代に必要な対応が示されている。

第四章ではシカ採食圧下にあるササ実生群落の保護による回復過程の経時的な追跡から、採食圧の解消が一斉開花後の実生更新に与える影響について解析を試みている。具体的には、防鹿柵を設置して実験的にシカの採食圧を操作すると同時に、防鹿柵の効果に関する評価も行っている。その結果、長年にわたる継続的な採食圧によるササ実生群落の衰退が明確であった対象地で、群落の保護によって資源量が回復する可能性が高いことを示している。

第五章では、資源の回復後にその生産を継続する社会環境の整備の必要があることを明示するために、全国的なササ葉産地の動向と京都府下の状況の分析を通して、地域単位で安定的な資源供給を持続するための課題抽出を行っている。その結果、京都市で起こっているササ葉供給の危機的状況は、大規模一斉開花と高いシカ採食圧の併発という特異な自然環境変動を機に顕在化したものではあったが、社会環境の面では日本社会に広く見られる課題と同様の状況を抱えていることを示した。すなわち、都市部への人口集中から引き起こされる農山村の過疎高齢化が資源利用に必要な労働力の不足を招いていることに加えて、ササ葉利用の産業構造が物価や雇用環境などの変化に適応できておらず、生産者に対してフェアトレードになっていないことも担い手不足の問題に拍車をかけていることを考察している。

第六章では、研究の総括として、得られた知見に基づき、京都府におけるササ葉資源の持続的利用について、自然科学と社会科学の双方の視点から総合的に考察を行っている。その結果、現在の京都におけるササ葉の利用は資源利用形態の転換期にあるといえること、何の対策もなされなければ資源も利用技術も衰退していくこと、等を示唆している。また、防鹿柵設置によって資源賦存量を確保することが喫緊に必要であることや、資源保全と並行して資源管理及び利用の担い手に適切な対価を還元して持続可能な営みを再生することを提案している。さらに、その実現には資源の受益者が適切な順応的管理を行っていくことが、ササという種の保全だけではなく、豊かな森林環境と農山村社会の再生にもつながることを指摘している。

注)論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入する場合は、400～1,100 wordsで作成し
審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

植物葉を包装材として利用する文化は世界各地で認められるが、京都府では京都市域を中心としてチュウゴクザサ（以下、ササ）の葉が利用されてきた。過去数世紀にわたり持続的に行われてきたこの資源利用は、我が国の近代化の過程における農山村の過疎高齢化や社会の変容に伴う森林を取り巻く状況の変化によって、前世紀末から失われつつあった。京都市北部地域におけるササについては、2004～2007年の開花時に生態学的な研究が行われたが、地域の林産資源として利活用されてきた経緯も視野に入れた総合的な研究はこれまで行われなかった。本論文は、京都府下のササ葉資源の利用の観点から、一斉開花後に保護されたササ実生群落回復のモニタリングという生態学的研究の視点と、資源利用に関わる人々や社会の諸相の記録・解析という社会科学的な視点を併せ持った研究である。本論文の評価すべき点として、以下の4点が挙げられる。

1. ササの開花枯死以降急速に失われつつある京都市北部地域のササ葉の採集・選別に関する伝統的な技術を詳細に記録し、作業効率やササ群落に及ぼす影響について考察している。また、慣習的な天日乾燥を経たササ葉が、現在主流化している機械乾燥によるササ葉よりも香りにおいて優れている可能性も示している。これらの成果は地域で培われてきた伝統的技術を、科学的客観性をもって評価することに成功している。
2. 京都市域におけるササ葉資源について、資源枯渇の危機の顕在化以降、保護活動の展開に至る過程を網羅的に記載し、分析を加えることによって、今回の開花に際しては資源管理体制や行政サポートが変化していったことを明らかにし、かつ多面的かつ詳細な情報として蓄積されていった過程を解析した。また、これらの情報は数十年後に必ず起こる次のササ開花への対応にも有益である。
3. 既往研究を踏まえた継続的なモニタリングによって、一斉開花後のササ群落の一時的消滅とシカによる実生回復過程にある群落への採食圧が併発した場合のササ群落の衰退過程と、人為的なシカの排除によるササ資源回復過程を示すことによって、群落の保護活動が資源再生に有効に機能することを生態学的に示している。
4. 現在のササ葉の流通に関する全国的な動向を踏まえた上で、京都府の状況を自然環境及び社会環境の両面から分析した結果から、今後の京都府下におけるササ葉の資源再生と利用の再興に関する実効性のある提言を行っている。

以上のように、本論文は京都府下のササ葉資源を取り巻く状況を総合的に把握し、現代社会において森林資源の持続的利用のために求められる方策を、生態学的知見も交えて示すことに成功していることから、景観生態学、森林資源保全学、森林生態学、文化人類学及び環境デザイン学の発展に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（農学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成30年1月18日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、博士（農学）の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。

また、当該学生は、本学博士課程教育リーディングプログラム「グローバル生存学大学院連携プログラム」を履修し、平成30年1月18日に同プログラムにおける学修内容と提出学位論文との関連性等に関する事項について試問を行い、同プログラムの修了要件基準を満たしていることを確認し、次いで、平成30年2月23日に本学博士課程教育リーディングプログラム運営委員会において、上記と同様の基準を満たしていることを確認し、それぞれ合格と認められていることを併せて報告する。

注) Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公開可能とする日付を記入すること。
要旨公開可能日： 年 月 日以降